# オプス・デイ属人区 長の書簡:「信仰年 にあたって」(後 半)

2013/05/03

教理的形成 教会の教理における形成信仰の教理を深める 祈りと犠牲によるキリストとの一致 十字架における キリストとの一致 キリストの御傷に入り込む 聖霊に頼ること 祈りという武器 犠牲という塩 使徒職の務め一人ひとり、自分の立場で パン種のように 沖へ! あらゆる手段を講じる はび 聖体信心 聖霊、来てください! 聖母信心 教理的形成

33. 創立者は形成の基本的な側面を 五つ挙げておられます。すなわち、 人間的な側面、教理宗教面、霊的 面、使徒職面、そして専門職面で す。<信仰年>は、特に教理面の形 成に改めて熱心に取り組むようれる形 成の理由は非常に単純です。信仰の <内容>と信仰自体の<意味>を個 人的に掘り下げるようにすること。 こうして、〈intelléctus fidei〉信仰 の知性を新たにし、同僚や友人に、 イエス・キリストにおける神の愛の神 秘を、ふさわしいやり方で告げ知ら せ、主に従うよう提案することがで きるのです。

# 教会の教理における形成

34. それゆえ、創立者はオプス・デ イの基本的な活動を明快に「教理を 伝えること」と要約しました。そし て、属人区の信者が、特に教理宗教 面で、確実な形成を受けることがで きるように、絶えず気遣っていまし た。各地域の必要性に適った計画を 組織し、クラスが途切れることなく 継続されているのを創立者は天国で 観て喜んでいると思います。私たち の心に刻み込もうとしつこいほど次 のように繰り返しておられたこと を、皆、忘れないことです。「あな た方に与えられる教えを自分のもの にするよう熱心に励み、それを自分 だけに留めないようにしなさい。あ

なた方が受けている形成を人々に伝える必要のあることを思い、喜んでその義務を果たしなさい。それは、他の人々も正しい意向で働き、実りをもたらすことができるようにするためです。」[1]

聖ホセマリアはいつも<仕えるた

め、仕えること>と言っていまし た。そして、このく仕える>という 動詞を、人々の役に立つこと、ま た、様々な状況に実際に対処できる ことなど、様々な意味に使っていま した。あらゆる分野で、神と教会が 計画することに実りあるように協力 することを望んで、しっかりとした 準備をすることの重要性をこの短文 にまとめていたのです。「人々に仕 えるためには、まず自分が役に立た なければなりません。つまり自分自 身を形成するということです。そう でなければ、よい道具にはなれませ んし、仕えることもできません。| [2] 使徒職の目的に当てはめて考え

ると、活きいきとした信仰を持ち、 信仰の知識を深めるように努める人 だけが〈役に立ちます〉。そのよう な信仰からのみ、オプス・デイの使 徒職と人々の教理的形成に<仕える >ことができるからです。

この必要性が消えることはないと深 く確信していた聖ホセマリアが、オ プス・デイの信者の教理宗教面の形 成の基準を定め、少しずつ実行に移 し、絶えず主との付き合い方を私た ちに教えておられたことを振り返っ てみましょう。「私たち全員に共通 の目的は聖性と使徒職です。この目 的を達成するためには、何よりも形 成が必要です。聖性も、使徒職も、 教理を必要とします。教理は、時間 をかけて、ふさわしい場で、ふさわ しい手段を使って学ばなければなり ません。神からの特別な照らしを期 待したりしてはなりません。神はそ のようにはなさいません。私たちに は具体的な手段が与えられているの

ですから。つまり、勉学と仕事です。形成を受け、勉強しなければなりません。」[3]

御父と御子と共に恩恵によって人々 のうちにお住まいの慰め主は、確か に、その声に耳を傾け、その勧めに 素直に従う人の、「頭と心にイエス の教えを染み込| [4] ませてくださ います。イエス・キリストご自身が慰 め主を<真理の霊>と呼び、はっき りと仰せになっておられます。「そ の方、すなわち、真理の霊が来る と、あなた方を導いて真理をことご とく悟らせる。その方は、自分から 語るのではなく、聞いた事を語り (・・・)。その方はわたしに栄光を与え る。わたしのものを受けて、あなた 方に告げるからである | (ヨハネ 16.13-14)。福者ヨハネ・パウロ二世 はこの文章を解説し、教えられまし た。「イエスがご自身のことを『私 は真理である』(ヨハネ14,6)と仰せ になったのなら、聖霊が知らせ、広

めるのはキリストについてのこの真理です。 $(\cdot\cdot\cdot)$ この霊は霊魂の明かりです。聖霊降臨の続唱でお願いするように、Lumen córdium心の光、なのです。 $\mathbf{L}$ [5]

すぐに古びてしまう世の流れに引き ずられないなら、キリスト信者の私 たちは誰よりも自由です。教会は、 信者たちに「カトリック信者である ことを自覚し、責任ある社会人とし て振る舞うように励ましています。 私たち一人ひとりの知性と心が互い にかけ離れてしまうのではなく、二 つを一致させぐらつかせずに行動す るのです。それは、未熟さや良心へ の不忠誠によってつかの間の好みと か流行に引きずられることなく、い つもはっきりと理解したなすべきこ とをするためです。『こうして、わ たしたちは、もはや未熟な者ではな くなり、人々を誤りに導こうとする 悪賢い人間の、風のように変わりや すい教えに、もてあそばれたり、引

き回されたりしないためです』(エフェソ,14)。」[6] **信仰の教理を深める** 

35. 神を知り、神を愛することを熱望し、人々が神を知り、神を愛するようにと望むなら、カトリックの教理によってますます私たちの理解力が形作られ、意志が動かされることがどうしても必要です。さらに、なから離れる傾向が主流な文化となっている現代においては、これは特に急がれる課題です。

そこで、継続した教理の勉強が非常に重要なものとなってきます。勉強を決してなおざりにしてはなりません。具体的には、一人ひとりの可能性に合わせて、前述したintelléctus fídei信仰の知性を得るため、神学の勉強をすることです。fides quærens intelléctum[7]信仰に照らされた知性という、活きいきとした喜ばしい緊張感を心の奥底にを持つ

べきです。このような知性は、深く 信じていることを更によく知ること に熱中します。神学の勉強は、惰性 的になったり、単に覚えるだけに なったりしてはなりません。そうで はなく、生き方に密着したものであ るべきです。それは、知性を全面的 に信仰の真理に沿ったものにし、信 仰のうちに信仰の視点から考えるよ うに助けてくれます。ただこうして のみ、職業上また社会生活全般で漕 遇する数知れない複雑な問題に対処 することができます。子どもたち よ、皆さんは自由な存在であり、一 人ひとりが全く自主的に決意し行動 するのですから、特に皆さんの知性 と良心を正しく形成するよう細心の 注意を払いなさい。それは、人間的 な学問だけではなく、神学の知識を 蓄えることで、皆さんがキリスト者 にふさわしい考え方で正しく判断し 行動するためです。

自分の専門職で、あるいは自国で直面している重要な課題に、カトリよるを課題に、カトリよるを見ばれて対処できるとした教理の知識を見ばなければなりません。課題代がしまらゆる地域にようが、も婚とでは、あらません。例えば、結婚となると、教育や生命倫理に関することなどです。

36. こういうことから、オプス・デイの中での様々な勉強における教授陣の改善と専門化を推し進めることを強調してきました。オプス・高とを強調してきました。オプス・高い大学で、大学で、高い、の霊的指導の下にある大学で、ことそのであるとを機りなきました。では、世界に専念する医学や生物学、大会学などの各専門分野のどいしてきました。

オプス・デイには、職場である公的 あるいは民間の教育研究機関で他の 人々と共にこのような什事を実現で きる人が少なからずいるはずです。 しかも、このような特別な分野で実 際に働いていなくても、社会的な報 道機関を通して、自然法を尊重しキ リストの教えを礎にした健全な世論 を作り出していくことのできる人が たくさんいます。皆さんにお伝えし たことがありますが、新聞への単純 な投書や〈eメール〉を通して、共 感を得ながらしかしはっきりと、 〈言葉の賜〉を使って、カトリック の教理を説明することは、分厚い専 門的な論文よりも効果的なことがあ るのです。ある国の世論が教会に対 するゆがんだ見方を示し、その上、 教会を傷つけるようなキャンペーン を繰り広げようとしているときに は、カトリック信者として黙ってい ることはできません。神との正義、 社会との正義のために、この理不尽 な行為に反旗を翻すべきです。うま

く隠れたように見える卑劣な攻撃を 明るみに出し、信者の中に不信心な 人がいるとしても怯むことなく、教 会にふさわしい尊敬を示すよう求め ることです。

繰り返しますが、そのためには絶え ず神学の研鑽をつむことが不可欠で あると納得し、一人ひとりの必要性 や環境に応じて、世論に見られる神 の啓示の基本的な面に関わる問題 を、深めるようにしましょう。哲学 や神学、教会法のクラスや講演をま じめに活用しましょう。このような 形成の時間に、多くの実りを得るよ うに望んで、きちんと参加しましょ う。さらに、このような活動は、他 の人たちにとって、彼らが望んでい る教理指導や霊的指導を受ける機会 になります。

37. ベネディクト十六世は、聖なる 教父たちの教えを分析し、現代特に 重視されている点を取り上げておら

れます。古代の異教が、神の知恵に よって人の心に刻まれた道に留まら なかった大きな間違いを指摘されま す。「異教宗教の没落は不可避だっ たのです。それは宗教(すなわち、人 間の手で儀礼と慣習としきたりにお としめられた宗教)を存在の真理から 切り離したことから来る当然の帰結 でした。| [8] そして教皇様は、古 代の教父やキリスト教作家が、逆に 「<慣習>に基づく神話ではなく、 存在の<真理>を選んだ| [9] と付 け加えておられます。教皇様が述べ ておられるようにテルトゥリアヌス はこう書いています。「Dóminus noster Christus veritátem se, non consuetúdinem, cognominávit私た ちの主キリストはご自分を慣習では なく真理と呼ばれた |。[10] そして ペトロの後継者は次のように教えら れます。「ここでテルトゥリアヌス が異教宗教を指すために用いた< consuetudo慣習>という言葉は、近 代語でく文化的流行>、<時代の流

行>といった言い方で訳せるものであることにご注意下さい。」[11]

ある地域で相対主義が勝利を収めて いるように見えても、このような考 え方は多くの人を迷わせ、カードで 築いたお城のように崩れ落ちること を疑ってはなりません。なぜなら創 造主であり、歴史を導き、全てをつ かさどる神の真理に基を置いていな いからです。同時に、周囲の現実を 目にすることで、私たちは失望する ような状況や無意味な生活に引きず られないように、またそのような状 況にいる人々を無視しないように と、かき立てられなければならない でしょう。

祈りと犠牲によるキリストとの一致

38. 聖ホセマリアがアンティオキアの聖イグナチオの言葉をしばしば繰り返し黙想していたことをはっきり覚えています。彼は殉教した地ローマへの途上、自分は「神のための

麦」だから「キリストのための清い パンになるため」[12]

猛獣に噛み砕かれなければならないと考えていたのです。キリスト者の私たちも又、〈神のための麦〉です。というのも、私たちには、いろいろな理由から私たちの傍らにいる人たちに、霊的な糧を与える義務があるからです。

る決意を固めることです。個人的に誰もが経験していることですが、この自己を清めることは、超自然ののは実りを手にするために必要ななのです。神なる師が非常に明しておられます。「一粒の表は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(ヨハネ12,24)。

#### 十字架におけるキリストとの一致

39. イエス・キリストは、「全ての人が救われて真理を知るようになるテとを望んでおられます」(1テモテンをは、この聖なる野心なは、この聖なる舞うなは、この聖なる様を使まるといる。私たちは、べきです。様を使まるといるはないでするとりが、病気だったりいい国で言葉が分からなかったりで、病気だったりいい国で言葉が分からないの使徒職があいるなくても、本当に実り多い使徒職

を繰り広げることになります。例外はありません。それには、信心の規定を通して細やかに神と交わることです。仕事を最後まできちんと果たすよう努め、毎日のミサ聖祭でそれを神にお捧げするのです。主が待っておられる捧げ物は、私たちが小さな犠牲や要求を心臓の鼓動のように絶えず活用し探し求めることです。[13]

 ての人は神によって造られ、神が愛ゆえに御独り子をいけにえにすることで神に贖われました。それゆえ、回勅「神は愛」でこう述べたのです。『自らに逆らう神のわざは完全に実現します。こうして、イエスは、人間を高く上げて救うため、自分を捧げました。イエスは、ものを捧げました。イエスは、もとも徹底的な形で愛を示しました』(12番)。」[14]

### キリストの御傷に入り込む

40. 聖ホセマリアが度々たとえを使って話していたことを覚えてというでは、「師」の傍ら近く歩むことをむこく歩むことが多いたちもり、神ではいたの傷がいたでではいいと言っているがいと言っているがいた。「種まき人が袋から完熟したがないと言うないましたがいる。「種まき人が袋から完熟したで有まさいましたがいましたがありましたがありましたがありましたがありましたがありましたがありましたがありましたがありましたがありましたがありましたがありましたがありましたがありました。

なく、自分を与え尽くすべきです。 しかし、福音書に強調されているように、一粒の麦が実りをもたらすに は地に埋められ死ななければ(ヨハネ 12,24参照)なりません。ただこうし てのみ私たちは良い種になり、主が この世で神への道を拓くのにふさわ しい種になるのです。」[15]

この考察に照らし合わせて、本当に 自分は信心深く、償いをする人とな るよう努め、「祈りがなければ活動 に価値はなく、祈りの価値は犠牲に よって高められる| [16] ことを納得 しているかどうか糾明しましょう。 日々、最高の奉献を渇望し、人々の 善のため喜んで自分自身を効果的に 使い果たす望みを持つことができる よう主にお願いしましょう。そうし てのみ、毎日のミサでキリストと一 致して生きたホスティアになりたい という熱意を実現することができる のです。

そうすると、確かにイエス・キリストは傷ついた手に私たちを取り、聖ホセマリアが繰り返していたよう人との清い御血に浸し、私たち一人さことならは置かれた場所で私たち離く、遠く実に遠くまで私はされ、あらはる場所で私たちでしないがもたらされることでしよいがもたらされることでしたがもたらされることでした。人々の心に神の種を投げ込むたちの言葉とホ

黙が役に立つでしょう。本当に「祭壇上のパン、食卓のパン、つまり神と人間のパンに」[17]なるのです。するとイエスは、以前、群衆が「イエスから力が出て、全ての人の病う主をいやしていたから」(ルカ6,19)主に近づこうとして、主を捜し求めるでした人たちの霊魂と体にされたような、驚くべき新たな奇跡をなさるでしょう。

## 聖霊に頼ること

き、教会のためになるよう導いている聖霊の現存と働きの刷新を含むことになります。」[18]

それゆえ、個人的な使徒職とあらゆ る使徒職活動においては、何よりも 聖霊が間断なく働いているという現 実を確信しましょう。人々の聖化 は、たとえ、沈黙のうちになされる とはいえ聖霊によって成就されるの です。聖霊は「私たちの時代におい ても、新たな福音宣教の中心的な主 体者です。(・・・) 聖霊は、人々の心 をかきたて、時の終わりにもたらさ れる完全な救いのこの世における芽 生えを早めつつ、歴史の流れの中で 神の国を建設し、イエス・キリストに おける神の国の完全な表われを準備 するのです。」[19] 次のことを疑っ てはなりません。私たちが信仰を もって慰め主に願うなら、聖霊が私 たちに適切な言葉を語らせ、時官を 得た勧めをさせ、間違った行動を優

しく謙遜に正させ、人々が反応する よう助けることになることを。

ですから、聖霊との交流を真剣に深 めましょう。聖ホセマリアも、忠実 な子どもたちにおいて働かれる主に ついて話し、こう教えました。「神 はお通りになるだけではなく、私た ちのうちに留まられるのです。言う ならば、私たちが罪によって主に対 立したり、主を追い出したりしない 限り、恩恵によって霊魂の中心に留 まり、私たちの行動を超自然のもの にしてくださいます。神は皆さんの うちに、そして私のうちに、一人ひ とりのうちに、隠れておいでなので す。」[20]

# 祈りという武器

42. 再度、オプス・デイ創立者の列 聖式での福者ヨハネ・パウロ二世の 言葉を読みましょう。「骨の折れる 困難な使命を果たすために、祈りに よって養われた内的生活が必要で

この霊的態度は、聖なる司祭・創立者が、主の介入以来実行していたことです。それは、あらゆる事をしな草ればならなかったオプス・デイ草創期に、はっきりと映し出されていります。オプス・デイが生まれたばかりの赤ん坊のような頃、1930年に、シャセマリアは、当時の唯一人のメにも当ま送ったことは、いつの世にも通

用します。「主が望まれ、私たちが望んでいることをすべきならば、何よりも、祈りと罪の贖い(犠牲)というしっかりとした土台に基づかなりません。祈ること。繰り返しますが、朝起きれば念祷を決して忘れないことです。そして毎日、である困難や犠牲を全て償いとして掛げることです。」[22]

これは、信仰生活を深め、主がキリ スト者に委ねられた超自然的な使命 を果たすために、不可欠な振舞い方 です。この模範に倣いましょう。厳 しい専門職においても、お聖堂や教 会の静けさの中でも、通りの雑踏に おいても、気晴らしや休息のときに も、また、当然なことですが、家族 の世話、病気や障害のあるときも、 あらゆることを全て、神に話し、全 身全霊を傾けて、神に喜んでもらえ る祈りに変えるように努めなければ なりません。多くの場合、言葉は不 要です。しかし、繰り返しますが、

祈りは信仰生活の実りです。本当に確信して願うためには、聖ホセマリアがしたような強い信仰が必要です。聖ホセマリアは「イエスよ、何か言ってください。何か言ってください、イエスよ」と頼んでいました。

真実に祈る人は、謙遜の徳に進歩することを忘れてはなりません。そして、祈る人は、神の子としての喜びに満ち、使徒職が日々の急務であることを感じ、いつも愛情深く、礼儀正しく振る舞い、仕えることを知り、姿を消すことに努め、霊的指導に素直であるのです。

#### 犠牲という塩

43. 主との付き合いと切り離せないことは、感覚の祈りとして神に届く犠牲です。「贖罪」という言葉にびっくりする人がいます。耐えられないような刑罰を想像するのです。実際は全く逆です。通常、神が私た

ちにお求めになるのは悔い改める心です。それは、個々人の立場や環境に固有の義務を丁寧に果たすことに表れます。つまり、難しくても喜んで忍耐強く、来る日も来る日も、小さなことにも徹底して忠実を保ちつ、義務を果たすことです。

聖ホセマリアは、主に頼まれた大きな償いを惜しみない心で実行しまったのでまれたで実行の使命のたったのです。また愛に満ちたのです。また愛に満ちたりのでありまずに、良心の知知では、次のような知ります。「償い。今日、神上のがあります。「償い。今日、神上のがあります。「償い。今日、神上のがあります。「僚たちの性格に由来するとに対しては?

自分の惨めさから来たことに対しては? 度々主に背いたことの悲しみや痛みを償いとして主に捧げることができたか。諸徳に遅々として進歩し

ていないと考え、内的に赤面し、恥ずかしく思ったことを主に捧げたか。」[23]

いつでもそうかもしれませんが、世 界は今、神に対する愛のために進ん で犠牲を引き受け、愛のうちに実行 する人を特に必要としています。快 楽主義がキリスト者やそうでない人 たちの間にも多くの犠牲者をもたら しています。どんなときでも、犠牲 は快楽主義との戦いに打ち勝つ武器 です。また体や感覚の行き過ぎた安 楽に対する武器でもあります。自分 自身への無秩序な執着を踏み潰すた めの手立てを考えましょう。それ は、内外の諸感覚、能力、霊魂と体 をキリストと一致して供え物として 捧げること、また本当のいけにえと することに具体的に示されます。そ れは実際に、私たちの内外の諸感覚 と能力、心と体、つまり全存在を素 直に奉献し、イエス・キリストとの緊 密な一致のうちに真実のいけにえに することです。

私たちは「生命を捧げ、条件をつけ ずに、ごまかしたりしないで献身し なければ | なりません。 「それは私 たちの罪、兄弟である全ての人の 罪、あらゆる時代に犯され、世の終 わりまで犯される罪、何よりもカト リック信者の罪の償いのためであ り、神に招かれながら応えることを しなかった人たち、主の特別な愛を 裏切った人たちのためです。| [24] 創立者がいつも大事にしていた側面 を付け加えることにします。この戦 いに勝つには、希望をもって楽観的 であり、信仰によって人々に対する 神の愛を信じ、主が必ず勝たせてく ださることを確信することです。

44.聖ホセマリアのこの言葉は、いつもの犠牲を寛大に実行するよう励ましてくれます。私たちは皆、ためらうことなく清められることを必要と

しています。こうしてのみ、神の子の喜びを持って、自分の生活環境を健全なものにすることができるのできる。「償わなければなりません。しかし、それ以上に必要なのは神へ愛です。心の汚れを焼き尽くす愛し、心の惨めさを聖なる炎で燃えがらせる愛の火一、このような愛の火一、このように変がなければならないのです。」[25]

もし、恐れを感じるときがあったら、私たちへの愛のために苦しまれたご受難のイエスを見つめることを私も勧めます。「これでも(・・・)、あなたは恐れて、罪の償いのために犠牲を捧げられないのでしょうか。」[26]

キリスト者にふさわしいこの振る舞い方を通して、人々の中に、若者や年配者、健康な人や病気の人たちと実際に絶えず使徒職をすることが急を要することだという意識を高めるようにしましょう。専門職で関わり

を持つ人たちや友だち、親戚、そし て趣味など、普段の生活を繰り広げ ているところで関わりあう全ての人 たちに対しても同じことです。聖母 に、これからの数ヶ月間、神を信じ る喜びを述べ伝えるため、使徒職の 熱意を高めてくださるよう頼み、い つもこのように振る舞いましょう。 さらに、多くの男女が頑なにならな いで神の恩恵に心を開き、神ご自身 が、永遠の昔から、一人ひとりのた めに準備された永遠の幸せに到る小 道を、キリストと共に歩む決心をす るよう、御子の恩恵を十二分に送っ てください、とお願いしましょう。

# 使徒職の務め

45. 主が私たちに委ねられた「使命」使徒職は、これまで述べてきた「信仰生活」によってのみ実現が可能なことで、私たちはその信仰を「公に表わす」必要があります。教理に基づく信仰、その信仰に基づく

生活こそ、キリスト者の生き方を何事にもたじろぐことのない者とし、魅力あるものにするのです。信仰を持たない多くの人が、実は神を信じている人たちに見られる喜びや確信、平和を望んでいるのです。憧れだけかもしれませんが。

指摘したばかりですが、信仰の徳に

基づいた使徒職に専念しましょう。 それゆえ、日々、主への信頼が欠け てはなりません。神への侮辱や、霊 魂を傷つける多くの事柄を償わなけ ればなりません。子供たちよ、私た ちは、まさしく個人的な使徒職に よって、この償いが、急を要し、絶 えず続けるべきであるということに 気づくのです。この償いは確かに、 私たちのキリスト者としての思いの 深さ、社会の状況に対する誠実な嘆 きを明らかに示すリトマス試験紙の ようなものです。私たちはこのよう に振舞うようにしますが、創立者が 言われたように、もし私たちが神の

み手から離れると極悪人と同じ過ち や悪事を犯し得ることを心得てを す。無為に陥るあらゆる可能性を り払うことにしまう。一人いろいる しましばでで、めている のでで、がで同じ理想を追いが、でいる が、でいるに当な手段を駆使し で、あらゆる正当な手段を駆使し で、要áudium cum pace 喜びと平和の鐘が響き渡るまに に、恐れることなく平和の種まきに 行きましょう。

#### 一人ひとり、自分の立場で

46. 堅固な信仰をもって忍耐強く聖三位一体との対話を続けて土台を強化することは、具体的な使徒職をより豊かなものにします。人々に仕えるあらゆる機会を逃さず活用し、なあらゆる機会を出すことに大きな大なで行きましょう。を感じて歩んで行きましょう。を強力を感じて歩んで行きましょう。値かでも虚栄心に席を譲ることのない

よう自分を見張りつつ、いつも正しい意向をもって日々の務めを果たしましょう。こうして、あらゆる活動が立派な神への捧げものとなって、イエス・キリストと一体となり、生活の一致がもたらされます。

社会の新福音宣教の中核に、一人ひ とりがみ摂理によってふさわしい立 場を割り当てられています。しか し、受身的に振る舞って、忠実であ ろうと努めることだけで満足しては なりません。仕えるためには人々の 集まるところに出かけるのです。社 会にある様々な組織や大学や学校、 労働や休息の場で、そして家庭で、 彼らに必要なキリスト教的な形成を 与えることです。初代信者に倣っ て、世の中で教会の仕事に貢献する 聖なる促しを感じるべきです。時に は、見るからに過酷な障害を目の当 たりすることがあるでしょう。そん なときには、聖ホセマリアが例外な

しに全ての子供たちに宛てた手紙の 数節を当てはめることです。

「子どもたちよ、時々(・・・)自己の卑小さを感じ、次のように考えることは当然なことです。私にこの全ての仕事を? とるに足りない存在の私に?惨めで間違いだらけのこの私に?

こんなときには聖ヨハネの福音書の 生まれつきの盲人の癒しの場面を ゆっくりと黙想するよう勧めます。 ご覧なさい。主がどのように地の埃 と唖で泥を作り、それを盲人の目に 塗られるかを(ヨハネ9.6参照)。主 は、少量の泥を薬としてお使いにな ります(・・・)。私たちは、自分が弱く 何の取りえもない存在であることを 重々承知していますが、しかし神の 恩恵と善意があれば、光をもたらす 薬になります。自分の小ささを見せ 付けられても、私たちは人々のため の神の砦なのです。| [27]

ある人たちは立場上、この新たな文 化や法律、何度も話したように、新 たな流行を作り出していくための最 前線で活躍するでしょう。流れにひ るむことなく、それを福音の精神に 沿ったものにするよう精進しなけれ ばなりません。繰り返しますが、私 たちは皆、この | 愛と平和の戦い | で具体的な場を任されているので す。一人ひとりが、最前線であれ、 後衛であれ、全教会との交わりのう ちに、この目的を効率よく果たして いくため、直接的な使徒職をしてい く立場にあるのです。

#### パン種のように

47. 職場や親戚、友人・知人の集まりで、対立的な雰囲気が特に強く醸し出されるときには、主がキリスト信者を召されたのは世のパン種になるためであるという責任を深く考えることです。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトン

の粉に混ぜると、やがて全体が膨れる」(マタイ13,33)。そして聖ヨハネ・クリゾストモはこう説明しています。「パン種が自身の力で粉の大きな塊を変えるように、あなた方は全世界を変えなければなりません。」[28]

神は、世の歴史の中でこのように働 かれましたし、また働いておられま す。神の御手には全ての被造物を従 わせる力があります。その御力に反 抗できる人はいないからです。しか し、そうすると主ご自身が私たちに お与えになった自由を尊敬なさらな いことになります。神は力で説き伏 せるのではなく愛によって納得させ ようとお思いです。それには自由で 熱心な協力者を頼りになさいます。 神なる師は、飼い主のいない羊のよ うにさまよっている人たちや群集を 見過ごすことなく、皆に関心をお持 ちです。独裁者のように<真理>を押 し付けることは好まれませんが、か

といって、人々の無知や倫理的な逸脱などに無関心のままではおられません。それゆえ、祝宴に招く良き父親の口を借りてこのような指示を出しておられるのです。「通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ」(ルカ14,23)。compélle intráre!

「キリストは、一箇所に留まって、 人々が御許に集まるようにすること も可能であったが、そうはなさらな かった。私たちも通りに出て行くよ うに模範を与えようと、はぐれた羊 を探す羊飼いのように、また患者に 対する医師のようになさった。」 [29]

教会は、このようなやり方を絶え間なく続けて世界中に広がり、数知れない回心を導き出したのです。並外れた人物による活動で実りがあって、綿密に練られた作戦で結果が出るということはほとんどありませ

ん。信仰生活をごく自然に実行した 男性や女性、廉潔な家族のよい模範 のおかげで湧き出たのです。恩恵に 支えられ、自然に信仰を実行し自ら が抱く希望の理由を示し続けること ができました。(1ペトロ3,15参 照)。

キリスト信者一人ひとりの責任は何 と偉大なことでしょう。多くの偉大 な仕事を実りあるものにし、魅力あ るものにするのは、私たちの振る舞 い、私たちの使徒職の熱意いかんに よるのです。「ある人たちが無味乾 燥になるなら、あなた方はその味わ いを取り戻させることができます。 しかし、あなた方が無味乾燥になっ たら、他の人たちをもそれに巻き込 んでしまいます。それゆえ、役目が より重要になればなるほど、熱心に 神を敬うよう努めることが必要にな ります。」[30]

48. 一人ひとりは小さなものです が、属人区の信者、協力者や友人の 使徒職は、オプス・デイ創立当初か ら、主の御手の道具として教会の懐 の中で湧き出てきました。私たちは 叫び続けなければなりません、 Grátias tibi, Deus! と。それと同時 にもっとたくさんのことをしなけれ ばならないでしょう。Duc in altum! (ルカ5.4)沖に漕ぎ出せ! 恐れずため らわないでもっと遠くへ行きましょ う。主の願いであるという固い基盤 にいつも支えられ、主への確かな信 仰に満たされて沖へ漕ぎ出すので す。信仰年は、何と広々とした使徒 職の展望を見せてくれることでしょ う。皆さん一人ひとりがその展望を 活用する熱意を持っています。使徒 職はあらゆる場所で実現できます。 何よりも、人々や具体的な願いのた めに神に頼むことを心がけながら。

先に述べた再福音化の優先的分野に ついて考えてみましょう。信仰年に

あたって、私たち一人ひとりどのよ うに自分の役割を果たしているか振 り返ってみましょう。キリスト教的 な味わいを、自分の家族、忙しい職 場、参加している文化的社会的集ま りそして休息の場に伝えるために何 をしているでしょうか。勇気を出し てこの糾明に取り組み、個人的状況 に合った結論を引き出しましょう。 空しく不安がることを避け、しかし 必要ならば愛の痛みからしっかりと した決心を引き出すことです。そう すると、確かに不十分な点があると いう結論も出てくるでしょう。もっ と信頼を持って忍耐強く集中的に祈 ることができたこと。おそらくより 惜しみなく犠牲を捧げることができ たこと。人々への奉仕において使徒 職的な会話をもっと積極的に押し進 めるべきだったこと。教理的形成に 注意を払わなかったことなど。また 時には、主が人々を獲得するため私 たちを役立てようと望まれたことに 感謝することもあるでしょう。

私たちは、このような現状に落胆す るのではなく、新たな励ましとして 受け入れ、信仰をより活きいきとし たものにしてくださるよう神にお願 いし、再び始めなければなりませ ん。Nunc cœpi! と聖ホセマリアは 詩篇の言葉を繰り返していました。 「今、始めます。いと高き神の右の 御手は変わった | (詩篇76,11.Vg参 照)。望みどおりに成果があがらな かったとき、個人的な卑小さが歴然 とするときや努力が報われないよう に思えるときには、このように反応 しなければなりません。そんなとき こそ、すぐに再び始めることで解決 です。eúntes docéte! あなた方は 行って全ての民を私の弟子にしなさ い(ルカ5,4)。主が弟子たちを送り出 されたときのように主の言葉に信頼 して始めるのです。

49. これは、福者ヨハネ・パウロ二世が2000年を閉じるに当たって、カトリック信者に勧められたことで

す。「教会にとって新しい歩みが始まりました。この新しい千年期の初めにあたり、イエスのことばがわてしたちの心にこだまします。イエスのは、シモン・ペトロの舟に乗り、群した。『沖に漕ぎ出して網を降ろし、ました。『沖に漕を降ろしない』 < Duc in altum > (ルスのことばに信頼して網を降ろしまかり、シモンと仲間たちはイエました。すると『おびただしい魚がかり、網が破れそうになった』 (ルカ5,6)のです。」[31]

この場面は、創立者が生前しばしば 考察し、説教のテーマにしたところ です。私たちは、聖ホセマリアの 日のミサの福音書で非常に活きり とこの場面を観想します。繰りと を節をゆっくりと黙想することを めます。現代でもイエスの時代と が神のみことば に飢え渇いているからです。 主は、みことばが群集に届くようペ トロの舟に乗られました。そして、 話し終わると、シモンと他の弟子た ちに、協力を頼まれます。その時は 沖に漕ぎ出すことでしたが、度々、 ご自分の教えがますます広がるよう に、物的な協力をお求めになりま す。一方で、どのように最初は福音 宣教に参加するのかが具体化されま すが、それはペトロのつつましい船 のように教会に役立つ効果的な物的 手段を提供することです。こうして 人々の善に大きな効果をもたらしな がら働くことができます。しかし、 これだけでは不十分です。主はさら に、私たちが一人ひとり自分の立場 で個人的に、惜しみない心で、でき ることを駆使して使徒職をするよう 要求しておられます。人々をキリス トの足元に連れて行くという魅力あ る仕事に本気で自分を費やす人々が 緊急に必要です。

「Duc in altum! 沖に漕ぎ出しなさい! 私たちのために、きょう、このことばが響き渡ります。今を熱心に生きるために、神の恵み豊かな出来事を記憶にとどめるようにと招きます。『イエス・キリストは、きのうもきょうも、また永遠に変わることのない方です』(ヘブライ13,8)。」[32]

さらにベネディクト十六世がペトロの教座での司牧職を荘厳に始められた日の説教を引用して、その現実性を示したいと思います。

「今日も、教会と使徒たちの後継者 たちは、歴史の海の沖に漕ぎ出し て、網を降ろすよう命じられていま す。それは、人々を、福音へと―― 神と、キリストと、まことのいのち へと、導くためです。(・・・) わたし たちは疎外された状況の中に、苦し みと死をもたらす海水の中に生きて います。わたしたちは、光の失われ た闇の海の中で生きているのです。 福音の網は、わたしたちを、死の海 から引き上げ、神の光の輝きの中 へ、まことのいのちへと、わたした ちを導きます。このことは、実際に 真実です。人間をとる漁師となると いう、この使命を与えられてキリス トに従うとき、わたしたちは、人々 を、さまざまなかたちの疎外という 塩の味のついた海から連れ出し、彼 らをいのちの地、神の光へと導くからです。このことは、真実です。わたしたちの人生の目的は、人て、を示すことだからです。そ初めて、とだからになって初めまりになったりまける神と出るとであるかを知るのであるかを知るのです。」[33]

# あらゆる手段を講じる

50. 繰り返しますが、使徒職の実りのためには信仰生活を深めることが不可欠な第一条件です。それは、表のな手段により頼むここととを持ていたが、私たちが急しの、聖母、ととしてがあるとしてがあるなら、主があるなら、主があるないでは、協力者として効果的な働き

をすることができるでしょう。そのためには、主に倣い、友人や同僚、全ての人たちを心から愛さなければなりません。それは、mandátumnovum,新しい掟を実行することです。その掟を守ることで人々は私たちを主の弟子だと認めるでしょう(ヨハネ13,34-35参照)、と救い主が仰せになりました。

他方、主は、できる範囲で物的な手段を活用することをもお望みです。聖ホセマリアのミサの第一朗読のきれを推測することがれたます。全能の神は世界を創造された当の変を込めて人祖をおました。「主なる神は、東づくった人をそこに置き(・・・)、そこを耕し、守るようにされた」(創世記2,8-15)。

オプス・デイの創立者は、聖書のこ の一節を記憶に深く留めていまし た。主がみ旨を明かされた瞬間から、創世記のこの言葉に、仕事を聖なるものに変え、仕事を通して手を通して変え、仕事を通して手を通して事場で取っていました。イエスが30年の間ナザレの仕事場で働かれたことを、疑う余地のなりであることを明示しました。

あらゆる使徒職活動には、何よりも 神の助けに信頼することが必要的には同時に物には同時にからには同時にかられて、例えば、多のではがなりをもしたものとないがある要されたちのとないと、できまりとも協力で、世界中ではないとよる協力で、世界中ではないできます。

聖ホセマリアは、毎日、知り合いを 主に近づかせるため、今日私は何を しただろうか、と自らに問いかける ことを勧めていました。様々な機会 で、人々を導く会話の中でこの大切 な勧めを伝えていきましょう。ゆる しの秘跡にあずかるよう勧めたり、 キリスト信者としての生活の一端を よりよく理解するよう助けたりする ことでも伝えることができます。聖 アンブロジウスは、洗者聖ヨハネの 父ザカリアの舌が解けて話せるよう になった(ルカ1,64参照)ことをコメ ントしてこう述べています。「舌が すぐに解けたのには訳がありまし た。信仰があったからです。不信仰 によって縛られたものがその信仰に よって解かれました。| [34] 信仰を 活きいきと保っているなら、私たち の舌は、友情と親しい語り合いの使 徒職でキリストを証しするため滑ら かに動きます。またいつも、個人的 な祈りと犠牲、しっかりとやり終え た什事を惜しみなく捧げることが必

要です。これが、使徒職の目的を達成するため使うべきより重要な手段ということになります。

### 結び

51. 筆をおく前に、向こう数ヶ月間、皆さんの「信仰生活」をより深いものにするのに役立つことを三つお勧めします。聖体信心、聖霊との交わり、聖母信心です。一人ひとり霊的指導に助けられて個人的な状況に当てはめることができるでしょう。

#### 聖体信心

52. ベネディクト十六世は、自発教令「信仰の門」の中で、信仰年が「すべての信者のうちに、完全かつ新たな確信と、信頼と希望をもって信仰を『告白』したいという望みを呼び起こしますように」とご意向を説明し、こう続けておられます。

「信仰を典礼の中で、特に感謝の祭

儀の中で深く『記念』するためのよ い機会ともなります。感謝の祭儀は 『教会の活動が目指す頂点であり、 同時に教会のあらゆる力が流れ出る 源泉』(第二バチカン公会議「典礼憲 章 | 10)だからです。同時にわたした ちは、信者の生活の『あかし』がま すます信頼のおけるものとなること を祈ります。わたしたちが告白し、 記念し、生き、祈る信仰の内容を再 発見し、信じることについて考察す ることは、とくに『信仰年』の間、 すべての信者が自分のものとしなけ ればならない務めです。| [35]

2012年には、オプス・デイの歴史 上、特に意義深い記念日をいくつか 祝いましたし、また祝います。4月 23日、創立者の初聖体100周年、列 福 20周年(5月17日)と列聖10周年(10 月6日)、属人区設置30周年(11月28 日)など。「信仰年」の準備期間と信 仰年の間、歴史上のこれらの日々と 他の記念日が、至聖三位一体への感 謝と賛美を新たにする機会にならなければなりません。それが最もよく実現されるのは、ミサ聖祭において秘跡的に現存されるキリストのいけにえが最も良い方法ではないでしょうか。

それゆえ、「信仰年」の間「その中 にキリスト教の全ての神秘を秘めて いる」[36] 聖体に対する正しく堅固 な信心を表すようあらためて努めな ければなりません。キリストの唯一 の祭司職に参与することによっても たらされた賜を、一人ひとりがしっ かりと自覚し、より完全に自分のも のにするよう努めましょう。私たち は皆、洗礼によって共通の司祭職に 与っていますが、ある人たちは、そ の上、叙階の秘跡によって位階的司 祭職につきます。ミサ聖祭に参加し て祝う際に、司祭的魂を発揮するこ とを重要視しましょう。毎日、皆さ んの仕事や夢、皆さんの困難、皆さ んの苦しみや喜びを祭壇上に捧げて

ください。イエス・キリストは、それ をご自分のいけにえに包み込み、全 てを御父に捧げてくださいます。す ると、私たちの地上でのあらゆる瞬 間とあらゆる状況が神をお喜ばせす る献げものになり、真実の称替と感 謝、そして罪の償いのためのいけに えになるのです。こうして、聖ホセ マリアが心の奥底に秘めていた望 み、つまり、祭壇のいけにえに固く 一致することによって、私たちの全 存在、私たちの一日24時間を一つの |ミサ| にする、という望みが実現 されることになるでしょう。

53. この信仰年、ご聖体にイエス・キリストが実際に現存されることへの信仰を、もっと沢山の行いで表すようにしましょう。創立者は、どれほど深い愛をもってご聖体について話していたことでしょう。要理指導の旅をいつも人々の信仰を深めるたるに活用し、教会のこの宝について話していました。「主は、祭壇上にだ

けにお出でになるのではありません。司祭が聖体になったパンを聖櫃に安置すると、そこには、終生おとめなる聖マリアの胎内で人となられた御子イエス・キリストが現存されるのです。ベトレヘムでお生まれになった後、ナザレで黙々と働き、十字架上で苦しみ死去し、そして復活し、天にお昇りになった御子が現存されるのです。」[37]

2012年初頭に、使徒トマスの信仰宣言「Dóminus meus et Deus meus! わたしの主、わたしの神よ」(ヨハカたしの神よ」(シスを繰り返すよう勧めまてまり返すといるとき、聖なるとき、であるときでであるときでであるときでである。ますといましまが、これであられています。御外を利拝しまりであります。御身を礼拝しまりであります。御身を礼拝しまりであります。御身を礼拝しまりであります。御身を礼拝しまりであります。御身を礼拝しまりであります。御身を礼拝しまりであります。御身を礼拝しまりであります。御身を礼拝しまりであります。

す。御身の友達になりたいのです。 御身は私を贖ってくださった方です から。私は御身のために愛の人にな りたいのです。御身は私にとっての 愛であられますから。」[38]

子どもたちよ、よき父親に似ること は躾のよさを表します。聖ホセマリ アから引き継いだ小道を注意深く歩 み通すよう努めましょう。毎日、ご 聖体への信心をより細やかなものに するよう、聖なる熱意を燃え立たせ ましょう。ご聖体のイエスへのあい さつや、教会やセンターの聖堂の出 入りの時のあいさつには、友として の全霊を込めましょう。言葉や心で 愛情を表すことは当然ではないで しょうか。このように振舞わなけれ ばなりません。働いているところか ら射祷や霊的聖体拝領を通して主に あいさつするのです。主に反抗した り主がないがしろにされているよう なことを見たり聞いたりするときに は償いを捧げましょう。ご聖体への

お辞儀が本当の礼拝の行為になっているかどうか考えましょう。

これまで述べたことは、〈オプス・デイになり〉、〈オプス・デイをする〉ことを望む人に固有のご聖体への愛の表明についての一素描であり、まだ他にもたくさんあります。

# 聖霊、来てください!

54. 現代の教会において最初の聖霊 **降**臨の奇跡が繰り返されるように、 信仰と希望をもってなぐさめ主にお 願いしましょう。十二使徒が聖霊に よって全面的に変えられたことにい つも驚嘆します。彼らは恐れを追い やり、出会う人皆にキリストについ て話そうと、きっぱりとした態度 で、大志を抱いて出掛け、困難に遭 遇するときには祈りに赴くのでし た。そんなときには特別に慰め主を 遣わす、と約束された主のみことば を固く信じていたのです(ヨハネ 14.15-18:

ルカ21,12-15参照)。使徒言行録にこう記されています。「祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語り出した」(使徒言行録4,31)。

主は使徒たちにこう仰せになりまし た。「その方、すなわち、真理の霊 が来ると、あなたがたを導いて真理 をことごとく悟らせる|(ヨハネ 16.13)。慰め主は、彼らの死によっ てイエス・キリストによる啓示が完成 されるまで、使徒たちを導かれたの です。さらに、イエスのこのみこと ばは、あらゆる時代の教会に、特に 真の教導職に、真理の霊が欠けたこ ともないし、欠けることもないこと を示しています。そして、私たちが 主により頼み、救い主の神秘を日ご とに深く理解していくなら、慰め主 ご自身が私たち一人ひとりを導いて くださるのです。このように理解し ていくことは愛でもあります。愛徳

は聖霊ご自身が私たちの心に注がれるものだからです(ローマ5,5参照)。

55. 主は、聖霊が来ればキリストを信じない人々や世の誤りも明らかにすると約束されました(ヨハネ16,8-9参照)。私たちにもこの信念が必要です。私たちの主への信念が必要です。への全面的な信頼を深めなければ、自分自身、自分の可能性、人間的ようないのです。未だに私たちは、な自分を確信し、それに喜びを見出しているのではないでしょうか。私たちの確信と喜びは主から来るのです。

イエスを全面的に信じない罪に陥る ことを避けつつ、この必要性を理解 させてくださるよう、聖霊にお願い しましょう。また、聖霊の光と火り 私たちを弱さから解き放ち、キリっ トへの信仰と愛がますます深まして いくよう、聖霊に助けを頼みましょ う。毎日でも言いたいことですが、 前世紀の30年代に創立者が作った祈りの言葉を、度々黙想し味わうようにすることをお勧めします。「おお、聖霊よ、来たり給え。御身の掟が分かるように私の知性を照らし、敵の計略に対してわたしの心を強め、意志を燃え立たせてください。・・・

御身の声を聞いたのに、後で・・・、明日、と言いながら、頑なになって反抗したくありません。Nunc cœpi! 今すぐに、明日は来ないかもしれない。

おお、真理と知恵の霊、知識とよき勧めの霊、喜びと平和の霊よ! 御身がお望みのことを、お望みのゆえに、お望みのときに、お望みのように、お望みのときに・・・、私も望みます。」[39]

これらの願いを深めると、聖霊との 親密な友情がますます深まってい き、聖ホセマリアが書いたように、 聖三位一体の各ペルソナと付き合う ことの必要性が分かるようになります[40]。

また、聖霊に、私たちのことばと振る舞いが人々を変えるものになるよう、その火で清めてくださいとお願いしましょう。いたるところで使徒職ができるように、その炎で私たちを燃え立たせてくださいと真剣に信仰をもって祈りましょう。Ure igne Sancti Spiritus! 主よ、聖霊の火で燃え立たせてください。

# 聖母信心

56. 聖書に出てくる全ての偉大な人物の中で最も偉大な方は聖母です。マリアは、神を愛し、神に一致するためには、自由な心で神のみむねに全てを委ね、いつも深い信心をもって生きる必要のあることの象徴的な模範として際立っています。教会は、信仰年にそのことを特別に指し示します。「『信仰年』の間、信者

が特別な信心をもってマリアに向か うように招くことも有益です。教 の模範であるマリアは『選ばれの模 の全共同体に対して諸徳の65)の を大して輝いている』(教会憲章65)の を大してす。それゆえ、信者が救割しておいてするです。 でするマリアを愛しとないだし、と徳に做うための助けれます。 の信仰る取り組みが勧められます。の がいために、 主要な聖母巡礼地適切 です。」[41]

まず私たちがこの信仰年にすべきことは、典礼暦の聖母の祝日を心から望み、実り多い祝い方をすることです。本当に家族の祝日とするようお願いします。子どもたちは、聖母の数々の記念日で喜びに満たされ、濃やかな愛情を込めて聖母を称えます。

聖母の巡礼所や小聖堂に赴き、心を 込めて自分と人々を聖母にお見せ同 ましょう。親戚や友人、「信仰年」を でを伴うときには、「信仰年の では、「信仰年のは、「信仰年ので、 でれたべえず行される、まで は、かけれるが滞るのなりででは、 をでかれたでするがでしまりででいる。 では、 でのないでは、 でのないでは、 でのないでは、 でのないでします。 では、 でのないでします。 では、 ないない方法があるでしょうか。

 られたのです。個人的な罪と怠慢、 またキリスト信者や全人類の侮辱や 怠慢を償うようにしましょう。

57. ベネディクト十六世は、聖母の Magnificat 讃歌をコメントし、こう 述べておられます。「マリアは、神 がこの世で偉大な方となり、ご自分 の生活においてかけがえのないお方 であられるように、そして私たち皆 の中に現存されるよう、お望みで す。神が私たちの生活で『競争者』 になられることを、その偉大さで私 たちの自由や生活空間から何かを取 り除き得ることを恐れません。聖母 は、神が偉大であられるのなら、わ たしたちもまた、偉大なものである ことをご存知でした。私たちの命を 縮めるのではなく、引き上げ偉大な ものにするのです。確かにそうする と神の輝きで私たちは偉大なものに なるわけです。」[42]

「全能の仲介者」の取り次ぎを確信 して、社会の再福音化を目指してい る私たちと全カトリック信者の努力 に実りをお与えくださるよう、主に せがみ続けましょう。そのため今年 は、beata Maria intercedente おと めマリアの取り次ぎによって、多く の人たちの眠ったような信仰、傷つ けられたような信仰を目覚めさせ、 また信仰を持たない人にはそれを望 ませるように振舞わなければなりま せん。キリストとそのみ教えを伝 え、広めるためにあらゆる機会を活 用しましょう。教会に仕えるため に、よりきっぱりとした態度で友情 と親しい語り合いの使徒職を実行し てオプス・デイの精神を、多くの人 に伝え、様々な社会層の人たちが私 たちの使徒職に加わるようにしま しょう。

58. 一人ひとり、これらの望みを実現させるためにどの程度まで、責任を感じているかということを糾明し

ましょう。通常の社会生活で、週末 や休暇期間、休息のときも、様々な 状況を、より遠くの人を知り、よう 多くの人に仕えるため、どのように 活用しようとしたかを、誠実に振り 返って見ましょう。端的に言って、 どのように、通りや他の場所を使徒 職と使徒獲得のための祈りで一杯に したでしょうか。

聖母は信仰の師です。「神の民の太 相ブラハムと同じように、マリア も、『望みのないとき、望みを抱い て』、神なる父に対する娘の信頼と 御子への母の慈愛を合わせもって、 生涯『お言葉どおり、この身になり ますように』という信仰の歩みを続 けたのです。この旅路のところどこ ろでは、特別に、『信じたかた』へ の祝福が明らかにされるでしょ う。| [43] 私たちと同時代の教会の 歴史は、聖母の母としての現存に よって著しく特徴付けられなければ なりません。「教会にとっても、個

人あるいは集団にとっても、民族、 国、またある意味で全人類にとって も、マリアの比類なき信仰の旅路は 変わることのない手引きです。」 [44]

59. イエス・キリストのご昇天後、最初の弟子たちはエルサレムの高の降まり、マリアを囲んで聖霊ののと共にで聖母となることとなることとを確信させることを確信がある私たちですがら、私たちはですがらないのは、聖からないの言葉であるとを、聖ホセマリアの言葉であるとを、といましょう。

「使徒の元后、聖マリアよ、御身は 人間のみじめさをよくご存知ですか ら、私たちのために赦しを願ってく ださい。火となって燃えるべきで あったのに灰と化し、輝きを失って しまった光、味を失ってしまった塩 である私たちのために。神の御母、 全能の嘆願者よ、赦しと共に希望と 愛に生きる力をお与え下さい。人々 にキリストへの信仰を伝えるため に。」[45]

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

ハビエル

ローマ、2012年9月29日

- [1] 聖ホセマリア、1959年1月9日手 紙34番。
- [2] 聖ホセマリア、1968年5月6日家 族の集まりでのメモ
- [3] 聖ホセマリア、1954年11月21日 説教のメモ
- [4] 福者ヨハネ・パウロ二世、1991 年4月24日一般謁見の講話。

- [5] 福者ヨハネ・パウロ二世、同上
- [6] 聖ホセマリア、1945年5月6日手 紙35番。
- [7] 聖アンセルムス、『プロスロギ オン(PL 158,225) 』
- [8] ベネディクト十六世、2007年3月 21日一般謁見の講話。
- [9] 同上。
- [10] 同上。テルトゥリアヌスの引用 は『処女の被りものについて』I, 1(PL2,889)にある。
- [11] 同上。
- [12] アンティオキアの聖イグナチ オ、『ローマ人への手紙』IV,1(Funk 1,216)。
- [13] 聖ホセマリア、『鍛』518番。

- [14] ベネディクト十六世、2006年3 月26日説教
- [15] 聖ホセマリア、1964年5月28日 説教のメモ
- [16] 聖ホセマリア、『道』81番。
- [17] 聖ホセマリア、1954年5月31日 手紙29番。
- [18] 福者ヨハネ・パウロ二世、1994年11月10日使徒的勧告『紀元2000年の到来』45番。
- [19] 同上。
- [20] 聖ホセマリア、1971年12月8日 家族の集まりのメモ。
- [21] 福者ヨハネ・パウロ二世、2002 年10月6日聖ホセマリア列聖式ミサ の説教。
- [22] 聖ホセマリア、1930年11月23 日イシドロ・ソルサーノへの手紙。

- [23] 聖ホセマリア、1930年7月28日 『内的考察』75番。
- [24] 聖ホセマリア、1932年1月9日手 紙83番。
- [25] 聖ホセマリア、『聖なるロザリオ』喜びの第四の神秘。
- [26] 同上、苦しみの第二の神秘。
- [27] 聖ホセマリア、1957年9月29日 手紙16番。
- [28] 聖ヨハネ・クリゾストモ、マタイ福音書についての説教。
- [29] 聖ヨハネ・クリゾストモ、聖トマス・アクイナスが、『神学大全』 III,q.40,a.1-2 で引用している。
- [30] 聖ヨハネ・クリゾストモ、聖マタイ福音書についての説教、 15,7(PG57,231)。

[31] 福者ヨハネ・パウロ二世、2001 年1月6日使徒的勧告『新千年期の初 めに』1番。

[32] 同上。

[33] ベネディクト十六世、2005年4 月24日就任ミサの説教。

[34] 聖アンブロジウス、『聖ルカ福音書の解説』II,32(CCL14,45)。

[35] ベネディクト十六世、2011年10 月11日自発教令『信仰の門』9番。

[36] 聖ホセマリア、『会見記』113 番。

[37] 聖ホセマリア、1972年11月1日 家族の集まりのメモ。

[38] ホセマリア、1972年11月22日 家族の集まりのメモ。

[39] 聖ホセマリア、1934年の手書き の祈り。

- [40] 聖ホセマリア、『神の朋友』 306番参照。
- [41]教皇庁教理省、2012年1月6日 『覚え書き』1,3.
- [42] ベネディクト十六世、2005年8 月15日被昇天祭の説教。
- [43] 福者ヨハネ・パウロ二世、1987 年3月25日回勅『救い主の母』14 番。
- [44] 同上 6番。
- [45] 聖ホセマリア、『知識の香』 175番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/opusudeishu-ren-qu-chang-noshu-jian-xin-yang-nian/(2025/12/16)